

## 第23回甲南大学総合研究所 公開国際フォーラム

### 自然保護と環境教育

—21世紀の自然と人間の環境を考える—

日時：10月19日（土）13:30～16:45

会場：甲南大学8号館813教室

主催 甲南大学総合研究所  
神戸市東灘区岡本8-9-1 電078-431-4341（代）  
共催 ユースサービス大阪  
(財団法人 大阪青少年活動財団)

# 第23回甲南大学総合研究所 公開国際フォーラム

## 自然保護と環境教育

—21世紀の自然と人間の環境を考える—

日時：10月19日(土) 13:30～16:45

会場：甲南大学8号館813教室

主催 甲南大学総合研究所  
神戸市東灘区岡本8-9-1 ☎078-431-4341(代)  
共催 ユースサークル 大阪  
(財団法人 大阪青少年活動財団)

# 第23回 甲南大学総合研究所・公開国際フォーラム

## 自然保護と環境教育

—21世紀の自然と人間の環境を考える—

日 時：10月19日(土) 13:30～16:30

会 場：甲南大学 8号館 813教室

人間の環境である自然、社会、精神のすべての環境で環境破壊が進行している。これらの環境病理に対処するためには、現代人は環境の根底である「自然」にもどる必要がある。そのとき、まず思い浮かぶのは“自然保護”であろう。

そこで自然保護政策の最先端で活躍されているカーク教授をアメリカからお招きして、自然保護の原点、市民団体による自然保護活動、自然との共生、自然保護から環境保護への発展について基調講演「アメリカにおける自然保護の歴史と現状」をお願いし、その後パネル・ディスカッションに加わっていただく。パネル・ディスカッション「自然保護と環境教育—21世紀の自然像と人間の環境を考えるー」では、日本の自然保護活動に長年たずさわってこられた柴田敏隆氏に日本の現状をお話ししていただき、アメリカの自然保護活動との比較をおこなう。そして、それらの自然保護思想なし環境保護思想が具体的にどのように環境教育に展開されるのかを、教育学の立場から鈴木善次氏に提案していただく予定である。

このような基調講演とパネル・ディスカッションを通じて、“21世紀の自然像と人間の環境”について参加者の方々と共に考えてみたく思う。

パネリスト

### Dr. ジョン・カーク

(アメリカ・ニュージャージ州立モントクレア大学付属自然保護学校の所長・教授。氏が全米キャンプ協会の会長の時に企業と連邦政府の援助を得て自然保護キャンプを開催し、その運動を高めた。全米自然研究学会会長)

### 柴 田 敏 隆

(コンサーバイショニスト。NHK「動物の生態」「茶の間の科学」「ポケット・サイエンス」などに出演。NHK「ウォッキング」民放の「ワクワク動物ランド」のブレーンも勤めた。環境庁自然公園指導員、日本自然保護協会理事)

### 鈴 木 善 次

(大阪教育大学教授・本学非常勤講師。20年近く前からすでに『人間環境論』を著し環境論の草分けであり環境教育研究の第一人者。日本環境教育学会事務局長、日本科学教育学会理事)

コーディネーター

### 谷 口 文 章

(文学部教授。人間を形式的に哲学で、人間の心を実質的に心理学でとらえ、さらに人間の環境を「環境人間学」から研究。日本環境教育学会運営委員、日本保健医療行動科学会理事)

## プログラム

13:30～ 甲南大学・中西典彦学長 挨拶

甲南大学総合研究所・野々山久也所長 挨拶

13:45～ 基調講演

ジョン・カーク氏「アメリカにおける自然保護の歴史と現状」

14:45～ パネルディスカッション

「自然保護と環境教育－21世紀の自然像と人間の環境を考える」

パネリスト：

ジョン・カーク氏（アメリカの自然保護の立場から）

柴田敏隆氏（日本の自然保護の立場から）

鈴木善次氏（世界の環境教育と日本の環境教育）

コーディネーター：

谷口文章氏（総合司会とディスカッションのコメントーター）

通訳：

田村菜穂子氏

16:45 終了予定

# 公開国際フォーラムを開催するにあたって

コーディネーター・ 谷口文章（甲南大学教授）

地球環境問題が、20世紀後半から21世紀にかけて差し迫ったものとなっています。甲南大学では早くからそれに対処する方向で、学内では総合科目「21世紀の人間と地球の環境を考える」を開設し、学外では1991年に甲南大学公開講座「21世紀の人間と地球の環境を考える」、1992年に日本環境教育学会関西支部第一回大会および1994年に日本環境教育学会第五回全国大会を主催してきました。また、1995年には広域副専攻・環境学コース16科目が開設され、1996年4月から文学部人間科学科・専門科目「人間環境論Ⅰ、Ⅱ」が開かれ学生達の環境問題解決に対する要求に答えていました。

さらに、今秋（1996年）12月14日には、カナダ、中国、タイ、フィリピン、ドイツなどから環境問題の専門家を甲南大学に招聘して「環境倫理と環境教育」についての国際シンポジウムを行い、翌15日には文部省研究成果公開促進費（平成8年科学研究補助金B）による公開シンポジウム「災害と環境－人と自然の共生のために－」を行う予定です。これらの催しものにつきましても、皆様の御参加をお待ちしております。

ただ、環境問題の解決のためには実践的体験が伴わなければその糸口にはならないと考えられます。上述のようなイベントを開催するためには、自然保護の知識や体験とそれを具体化する環境教育の視点がまず必要であると思われます。そこで今回の公開国際フォーラムのはこびとなりました。

人間の「環境」は、自然環境、社会環境、精神環境に分けることができます。そして、環境問題はそれぞれの領域で生じています。例えば、自然環境の破壊はオゾン・ホール、酸性雨、森林伐採、砂漠化、生態系の崩壊など、社会環境の破壊は公害をはじめとして、排ガスによる大気汚染、騒音、生活排水による水汚染、高層ビルによる日照権の問題、食品添加物・保存料などによる食品汚染など、精神環境の破壊は心の汚染としていじめ問題、燃え付き症候群、ボーダーライン・パーソナリティの形成などの精神病理が生じています。

これらの環境病理に対処するためには、現代人は環境の根底である「自然」にもどる必要があります。そのとき、まず思い浮かぶのは“自然保護”です。そこで自然保護政策の最先端で活躍されているカーク教授をアメリカからお招きして、自然保護の原点、市民団体による自然保護活動、自然との共生、自然保護から環境保護への発展について基調講演をしていただき、その後パネル・ディスカッションに加わっていただきます。

パネル・ディスカッションでは、日本の自然保護活動に長年たずさわってこられたコンサベイショニストである柴田敏隆氏に日本の現状をお話ししていただき、アメリカの自然保護活動との比較を行います。その後で、それらの自然保護思想ないし環境保護思想が具体的にどのように環境教育に展開されるのかを、教育学の立場から鈴木善次氏に提案していただく予定です。

このような基調講演とパネル・ディスカッションを通じて、皆様と共に“21世紀の自然像と人間の環境”を考えてみたく思っております。

## BIOGRAPHICAL SKETCH OF JOHN J. KIRK

Dr.Kirk started his professional career in the late 1950's as a member of the faculty at the University of Michigan. His next position was Supervisor of Camping Services for the State of Michigan, where he administered the licensing and inspection program for 1,000 children's summer camps in the state and established year round camps to rehabilitate socially maladjusted boys, ages thirteen to eighteen.

In 1963, he moved to New Jersey and for the past thirty-two years, has served as Director and Professor of Environmental Studies at the New Jersey School of Conservation, a division of Montclair State University. Under his supervision, the School of Conservation has become the largest college operated environmental field center in the world. He received his Bachelor of Science in Education from Boston University and his Master of Arts in Educational Administration and his Doctorate of Philosophy in Environmental Studies from the University of Michigan in Ann Arbor.

Dr.Kirk has lectured at International Environmental Conferences in southern Africa, the Republic of Ireland, Vancouver, British Columbia, Quebec and Japan. He has also lectured at over sixty colleges and universities in Europe and the United Kingdom. In addition, he has served as a consultant on environmental education curriculum development for the Republic of Mexico, six provinces of Canada and several states in the United States.

His articles on the history and philosophy of environmental education have appeared in nine languages in professional journals throughout the world. He has served as president of three national organizations, the American Camping Association, the Outdoor Education Council of the United States and the American Nature Study Society. He is currently serving as Coordinator for the United Nations Environmental Sabbath / Earth Care Day, a program he assisted in establishing in 1987 which takes place the first weekend in June each year and the threat to life on the Planet. He also serves as Vice-Chairman of the New Jersey State Commission for Environmental Education which has developed the New Jersey Environmental Education Master Plan.

Other professional activities include serving as Environmental Education Advisor and a member of the Board of Directors of the National Council of States Garden Clubs, Inc., with the responsibility to assist in developing Environmental Studies Schools throughout the country. He has also been appointed by the Governor of New Jersey to serve as a member of the Board of Trustees for the Sussex County Community College.

# 私の環境教育論

パネリスト・鈴木善次（大阪教育大学教授）

人類が「自分たちの住む大地は一つの球である」という認識を持ったのは史料に残されたもので知るかぎりではギリシャ時代からである。古代エジプト人やメソポタミヤの民が抱いていた世界は半球型、ちょうど「東京ドーム」に似た姿であった。ギリシャ人たちが地球を「球」として考えるようになったのは、「神の創造したものは完全で美しいものでなければならない。そうであればこの宇宙も、そして、その中に位置するこの大地も神の秘造物なので完全で美しい姿であるはず。完全で美しい姿とはどのようなものか。それはどこから見ても同じ形をしているもの。すなわち球である」。そのような論理によるものらしい。

それから二〇〇〇年ほどのち、一人の宇宙飛行士は自分の目でそれを確かめ、「地球は青かった」という名言を残した。その飛行士はおそらく地球を宇宙空間という沙漠の中に浮かび、生き物にやすらぎを与えてくれる唯一のオアシスとして受け取ったのであろう。

しかし、地上では数百万年にわたって人類の活動が続けられ、「神が創造した」その美しい宇宙のオアシスは少しづつ傷つけられてきていた。その傷がここ数十年で急激に大きくなっていることに人々は気づき始めた。一九七二年国連による人間環境会議がスウェーデンのストックホルムで開催され、「その傷がさらに拡大すれば地球上での人類の生存が危なくなる。そうならないために何らかの方策を立てるべきだ」という認識のもと、「人間環境宣言」が発表された。

「オンリー・ワン・アース」「宇宙船地球号」などという言葉が生まれ、人々は再び宇宙に浮かぶ一つの「球」として自分達の生活するこの大地をとらえるようになった。最近ではさらにオゾン層の破壊や地球の温暖化、あるいは沙漠の拡大など地球規模の環境問題が顕現化し、そうした認識が深まっている。ストックホルムの会議から二〇年目の一九九二年、ブラジルのリオで前回を上回る国や機関の代表が集まって環境サミットが開かれたのもその現れであろう。

環境や環境問題への人々の関心を高めようという動きは、わが国では早くから自然保護運動や公害反対運動とともに見られていたが、アメリカではレーチェル・カーソンの『沈黙の春』（一九六二年）による農薬汚染への警告を契機に一九七〇年「環境教育法」が制定され、財政的援助のもと具体的活動が開始された。国連では先の環境宣言の中で「いまやわれわれは世界の中で、環境への影響に一層の思慮深い注意をはらいながら、行動しなければならない」として環境教育の必要性が打ち出された。これを受けて、一九七五年に当時のユーゴスラビアのベオグラードにおいて環境教育の専門家による国際会議がもたれ、環境教育の目的・目標を定めた「ベオグラード憲章」が発表された。さらに一九七七年に当時のソビエト連邦、現在のグルジア共和国の首都トビリシで憲章の具体化についての国際会議が開かれ、意見が交換されたが、経済問題などの南北対立もあって、必ずしも共通

の認識は得られなかったようである。そのことはブラジルのリオでの会議でも同様であった。

地球的規模の環境問題の解決には国や民族の境を取り扱った立場をとることが必要である。宇宙船からみた地球には国境などないという。しかし、現実にはその国境をめぐって民族や宗教、あるいはイデオロギーなどの違いによる争いが絶えない。そうした人々に「宇宙船地球号」という認識をもってもらうことは可能なのだろうか。環境教育がそこにどこまで立ち入ることができるだろうか。

とかく自分が生物であることを忘れた行動をしがちな我々であるが、「自分たちも生物であること」「生物には生き方にそれなりの限界があること」などを再認識する必要があるのではないか。そこで本書では、はじめに「生物としてのヒト」という視点で生物学上の基本的知識を整理し、それに照らして自分たち人間の持つ特徴を検討する。その特徴の一つとして浮かびあがるのが、他の生物に比べて異常に発達した大脳である。そこで大脳の構造と仕組みにも目を向けてみたい。

ところで、他の生き物たちは与えられた自然に出来るだけ素直に適応し、もし不可能なときには適応しうる形に種を分化させることで生存してきているのに対し、「ヒト」はその大脳を使って自然に働きかけ、自分達に都合の良い環境にするために自然を作りかえてきた。そこに生まれたのが文化であり、広くは文明である。その文明も時代とともに姿を変えてきた。現代は科学文明と称される時代である。一七世紀に近代科学がスタートし、一八世紀の産業革命の中でそれが技術と結びつき、いわゆる科学技術が誕生した。科学技術は人々にさまざまなメリットを与えてくれた。しかし、今日の多くの環境問題に科学技術がかかわりをもっていることからもわかるようにデメリットももたらした。環境問題の解決にあたって、この文明のあり方を問い合わせるべきだという声もきかれる。そこで本書では「文明とは」「科学とは」「科学技術のあり方は」なども検討してみたい。

最後に、環境問題の解決に向けての教育のあり方をとりあげる。すでに述べたように環境問題の顕現化とともに環境教育や環境学習の必要性や声やその実践活動の報告も多くみられるようになった。今日の環境問題を単に科学技術のあり方の問題に置き換えることは短絡的すぎる。政治や経済など社会システムのあり方を抜きにして考えることはできない。そのことを承知の上で、一つのアプローチとして科学や技術と環境問題との関係を検討することは意味があるだろう。そのためにはこれまでの科学教育を再検討する必要がある。

最近では「科学と技術と社会」の関わりを考える人々の育成をめざす教育（いわゆるS・T・S教育）が教育界で話題になりだしている。これら環境教育やS・T・S教育では価値が問題になる。いかなる環境が望ましい環境、科学技術はどうあるべきか、それに対する答はそれぞれの人がもつ価値観によって異なるであろう。価値観が異なれば行動規範も違ってくるはずである。しかし、今や人類共通の価値観、行動規範が求められてもいる。それが環境倫理であり、そのことにも言及しよう。

（鈴木善次著『人間環境教育論』（創元社）の序より）

い」というものでした。

これは私達が認識している、国際的な自然保護の風潮と、余りにかけ離れています。しかも高名な博士度数のお考えとあれば、問題は大きい、と私達は判断しました。

この事件が要機となつて私達は数年前から私的に三浦半島自然保護の会を自称してきました。ですが、公に自然保護について社会的責任を持つて活動することを誓い、機関誌「自然のたより」を月間一千部ずつ作り、かたはしから配布したのと、採らず、殺さず、持ち帰らざるモットーとした自然観察会を毎月公開することにして、爾来、今日に及んでいます。

この時に、自然保護をコンサーベイションであると明確に規定し、誤解を避けるために意識して片假名のコンサーベイションを用いました。

現在、全国的に盛んな自然観察会で、常識的手法となつた白荷札や「紙芝居」での解説、プラスチックの苗箱を使った「インスタント・アクリウム」の方式は、この頃、私達が試行錯誤しつつ開発したもののです。

## 五、中央から全国へ

昭和三十年代半ばから、私達の地方での経験が徐々に、行政や自然保護活動のなかに反映できるようになってきました。私は神奈川県の自然環境保全審議会委員などいくつかの諮問機関の委員として、行政に強くはつき

りものがいえるようになりました。金田氏も私も即日本鳥類保護連盟、即日本野鳥の会、即日本自然保護協会の役員として、機関誌の編集や企画に直接関与し、私達の理念や手法を全国に演説敷衍することができました。私は環境庁の自然環境保全審議会委員を二期務めましたが、この間、長期計画、みどりのマスター・プラン策定、鳥獣法改正などに参画でき、大変勉強になりましたし、言うべきことも存分に甘ねせていただきました。

とりわけ日本自然保護協会で自然保護の尖兵となって全国で活躍して欲しいと念願して、その賛成を兼ねて始めた自然観察指導員養成講座は、昭和五十三年以來、全国各地を廻って百二十余回、七千余人にライセンスを差し上げることが出来ました。既に各地の自然公園で、ボランティア・レンジャーとして活動している人が少なくありません。これは最初から直接かかわって、全国を飛び歩いている私にとっても大変嬉しい成果です。

## 六、常に自然の中で

最近は、初心忘るべからずと思い原点回帰を強く決意しています。だから三十年来続けている自然観察会は、絶対に欠かさないよう努力してますが、此処から学ぶことは、だんだん多くなります。若い時に見えなかつたことが見えるようになつてくるのです。

今、子供の自然接觸の効用とその意義について幾つかの仮説を設定して、現場で検証し

ています。

最近は、身近な自然の問い合わせと、その中身が問題になっています。私も、環境庁（環境教育）、科学技术庁（みどり資源）、神奈川県（身近な自然）、横浜市（都市自然）、国民森林会議（教育森林）などのプロジェクトに関係して今までに大体の作業を終えました。田村賞の受賞は、「優れた論文に」ということになつています。私も、幾つかものは書いたましたが、この点に関しては全く汗顏の至りで、到底ここで皆様にご披露できる筋合のものではありません。ただただ選考委員の先生方の御厚情を深謝申しあげるばかりです。

ただ、とくに口舌の徒に頭しがちな私は、極力自然の中で、汗し泥まみれになつて字ぶ現地主義をつらぬきたいものと念願しております。

私の今日あるのは、多くの恩師、先輩知友それに優れた後輩諸氏のお力添えのたまものにはかなりません。ここに改めて深く御礼を申しあげます。有り難うございました。

程の体験でした。

戦争ってなんとむごいのであろう。そしてなんと無駄で空しい行為なのだろう。こんな行為はもうすべきではない。日本共に前途有為な若い人が大勢死んで、家族はどんなに嘆くことであろう。今思うと意外に冴えていて、軍団少年でなかつたな、と思います。

戦争中、MKローリングズの「仔鹿物語」を読み、健康なアメリカ社会の息吹を感じ、こんな国と触つて、果たして勝てるのだろうか？と子供心に危惧の念を抱いたのが現実となつたので、敗戦は割に冷静に受け止めることができました。

### 三、生命尊重と自然保護

学校を出て暫く、中学で理科の教師をしました。子供達には「どんな職業にも貴賤はない。しかし、人を殺すことになりわいとする仕事にだけは、決して就かないでほしい」と説いていました。

それなのに自分が教える理科の、自然学習では、やたらに採集をして標本を作ることになつています。平和と戦争放棄の原点は、まず生命尊重ではないか、と思う私には、この理科学習の旧態然たる博物学的姿勢は、すでに必要悪の限度を越えている、と見えました。

丁度、国立自然教育園（現国立科学博物館付属自然教育園）で新しい生態学の入門講座が開かれたので、校長の許しを得て、これを

受講しました。学生時代から日本野鳥の会に入り、また当時日本鳥学会の事務所があつた山陽鳥類研究所に足しげく通い、山陽芳賀先生、中西悟堂先生の御聟聾に接する機会を得ていたので、鳥類の保護やそれにかかわる世界の趨勢の概略は理解しておりました。

当時、GHQ天然資源局野生生物課長であつたO・L・オースチン博士のお話は極めて新鮮で感動的でした。

そうした下地があつたせいか、自然教育園での講座は、日の焼が落ちる思いで、私の自然保護への志向の土台となりました。

朝鮮動乱の頃から、高度経済成長のさざなは急速にたかまり、その一端はレジャーブームとなつて、私の住む三浦半島に押し掛けてきました。都心に近いこの観光地に、人々は大型バスで押しかけ、飲んで歌って騒ぎ、大量のごみと引き換えに、半島の動植物を土産代わりに乱獲して持ち帰りました。

この衝動的とも本能的ともみられる乱痴氣難ぎは何に起因するものだろう、と考えている折りに、田村剛先生が「都市人口が全人口の六〇%を超えると、人々の自然指向は、生理的レベルにまで高まる」とお書きになつておられたのをみました。これは後に品田櫻博士が

「緑被率が三〇%を越ると、人々は都心から脱出を始める」と具体的な数値を挙げて追認されたのです。

こうした教育や社会の実態を前に、どう対応したものか、と思案していた私に、有力な

示唆を与えてくれたのが、アメリカのナル・オージュボン協会ジユニアクラブの活動と、ソビエトのビターリ・ビアンキの主催する「森の新聞」運動でした。

### 四、地方での実験的試み

その頃、私の母校である県立横須賀高校生物部の顧問教師であった金田平氏（日本自然保護協会常務理事）も、私と同じような考え方を持っていました。それを、教え子が進学して、金田先生にお世話をすることによって知り、以降二人は意氣統合して中・高校生達と一緒にかく良く見る、この手法は野鳥の会の採鳥会のやり方ですが、自然の仕組みや生態を知るのに、極めて効果的でした。

たまたま昭和三十三年五月、東京の出版社の主催する採集会が、三浦半島で行われたとき、余りに酷い乱獲ぶりと指導者の珍奇種指向、それに、草木を倒し、ごみの捨て放題という自然に対するモラルのなさに、地元の「土人」として、都市的文明の横暴さにも腹立たしく思い、公開質問状で、その非を糾弾しました。

その返事は、大変丁寧ではありましたが、「自然は誰のものでもないから、だれが採るうと勝手だ。お前らにとやかく言われる筋合には無い」、「自然は豊かなだから、少し位採つても平気、お前述の心配は杞憂に過ぎない」

